

Works of Japanese Juvenile Art at the Time of the Pacific War (27) : Articles from the Shokokumin Shimbun (15)

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2019-08-26 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 熊木, 哲 メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/6721

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



「戦時下における児童文化」について（その二七）

―「少国民新聞」（東日版）における読者投稿作品の位相と展開（一五）―

熊 木 哲

【キーワード】 戦時下、児童文化、少国民新聞、綴方、昭和十八年

本稿では、昭和十八年（一九四三）に掲載された「綴方」について「戦時下」を内容とする作品について検討する。

なお、引用に際しては、原則として、旧字体を新字体に改め、作者については、在籍校名・在学年・性別を記すにとどめた。在学年次のうち「高一」「高二」は国民学校高等科一年、二年を示す。

一 昭和十八年の「綴方」作品の展開

昭和十八年の「綴方」掲載作品は、読者が「投稿した作品」（以下「投稿作品」と「少国民新聞」が募集した作品、つまり「企画された作品」（以下「企画作品」）の二種があるのは、前年と同様。

十八年は、投稿作品が一〇二、企画作品が七九、合計で一八一作品。十八年の四半期毎の内訳は、次のようになる。

第一四半期	投稿作品・一九	企画作品・二一	合計四〇
第二四半期	同	・二八	同
第三四半期	同	・二三	同
第四四半期	同	・一九	合計四二

「戦時下における児童文化」について（その二七）

十八年の四半期毎の投稿作品における「戦時下」を内容とする作品の内訳は、次のようになる。

第一四半期	投稿作品・一九	戦時下・一四（約七三・六八％）
第二四半期	同	・二八 同
第三四半期	同	・二三 同
第四四半期	同	・三一 同
（合計）	一〇二	（合計）七九（総計一八一）

作品内容に「戦時下」色に見えるのは、企画作品の総て、すなわち七九作品と投稿作品一〇二中の七三作品。合計で一五二作品となり、総「綴方」一八一の約八三・九七％を占めることになった。

また、投稿作品においては、一〇二中の七三作品であり、約七一・五七となった。

因みに、総「綴方」作品の内容に「戦時下」色に見える作品の掲載比率を昭和十四年から、整理すると、次のようになる。

十四年は二七六作品中 四四(約一五・九四%)
 十五年は三二三作品中 六一(約一九・四九%)
 十六年は二九〇作品中 八九(約三〇・六九%)
 十七年は二二〇作品中一二八(約五八・一八%)
 十八年は一八一作品中一五二(約八三・九八%)
 掲載比率は年毎に増加し、十七年は前年のほぼ倍増ともいえるほどであったが、十八年でも前年に匹敵するほどの増加率を見せたことになる。このことは、戦況の展開が総「綴方」作品の在り様を導いていったということになろう。

二 昭和十八年第一四半期における「綴方」

第一四半期に掲載された「綴方」は、投稿作品一九と企画作品二二を合せて、四〇作品。一九の投稿作品の内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の一四作品であり、投稿作品に占める割合は約七三・六八%。以下、便宜的に、整理番号を付す。

- 1 「覚悟を新たに」
 (東京市小石川区窪町校五年男子、一月六日・水、第一九五五号)
- 2 「兵隊さんにお礼」
 (東京市赤坂区氷川校三年女子、一月八日・金、第一九五七号)
- 3 「家のまはり」
 (山梨県甲府市湯田校二年男子、二月五日・金、第一九八一号)
- 4 「晴着ともんぺ」
 (神奈川県鎌倉市御成校六年女子、二月十日・水、第一九八五号)
- 5 「こままわし」
 (栃木県長岡校二年男子、同前)
- 6 「少国民のつとめ」
 (長野県池田校高二男子、二月十一日・木、第一九八六号)
- 7 「ボクノミタユメ」
 (千葉県船橋市葛飾校一年男子、二月十三日・土、第一九八八号)

- 8 「二宮金次郎さん応召」
 (青森県大鱈校四年女子、同右)
- 9 「兵隊さん送り」
 (群馬県長野原町校一分教場四年女子、二月十四日・日、第一九八九号)
- 10 「叔父さんの壮行会」
 (静岡県沼津市第二校四年女子、二月二十四日・水、第一九九七号)
- 11 「叱られた後」
 (北海道釧路市旭校五年男子、三月十二日・金、第二〇一一号)
- 12 「石炭運び」
 (北海道夕張校六年女子、三月十九日・金、第二〇一七号)
- 13 「尊い先生」
 (秋田県大館女子校五年、三月二十四日・水、第二〇二二号)
- 14 「おてつだい」
 (栃木県葛生校三年男子、三月二十六日・金、第二〇二三号)

- 1 「覚悟を新たに」(東京市小石川区窪町校五年男子、一月六日)
 - 2 「兵隊さんにお礼」(東京市赤坂区氷川校三年女子、一月八日)
 - 4 「晴着ともんぺ」(神奈川県鎌倉市御成校六年女子、二月十日)
 - 5 「こままわし」(栃木県長岡校二年男子、同前)
 - 6 「少国民のつとめ」(長野県池田校高二男子、二月十一日)
- 以上の五作品は、何れも新年に関わるが、内容が「戦時下」。
- 1 「覚悟を新たに」は、「昭和十八年を迎えて、戦時下日本の少国民である僕達は、更に銃後をしつかりと護り抜く覚悟を新たにしなければならぬ」との決意表明だ。「今日も決戦、明日も決戦。お正月だといつて遊びすごしてはならない」との「覚悟」は、五年生が親に、先生に、日々教え込まれたということか。
 - 6 「少国民のつとめ」は「体を大切に、勉強を一心にし、将来の日本をますます立派な国にするやう、そして大東亜共栄圏を建設するやうために誠心努力せねばなりません」というもの。「大東亜共栄圏建設の根本方針」が東條英機首相の施政方針演説で説明されたのは、

十六年十二月に開会した第七十九回帝国議会（十七年一月）。大東亜共栄圏の建設は、十六年十二月八日に開戦した太平洋戦争のスローガンであり、少国民もその建設に資する「覚悟」が要請されていた。

2 「兵隊さんにお礼」は、「お正月には、羽もついたり、すご六もしたり、かるた取りもしたり、ごちそうもいただけたり、ほんたうに私たちは、しあはせ」で、「お正月の初まゐりに働いて居られる兵隊さんの、武運長久をこころからおいのりいたしました」というもの。

4 「晴着ともんぺ」も、正月遊びの羽根つきでのこと。羽根つきの音に駆けつけて見ると「皆はきれいなすそもやうの着物を着て、ちやらこると、かはいいい音のするぼつくりをはいて」いたが、私はかすりのもんぺをはいているので、「ついはづかしくなつて来た」というもの。六年生女子の偽りのない気持であろうが、友達は、かすりのもんぺをみて「あらすてきね」といい、昼過ぎには、皆ももんぺをはいてきた。

私もお友達も、「時局柄」を考え、華美な服装を戒め、お正月でもモンペ着用に至ったということであるが、この背景には、「ぜいたくは敵だ！」とする国民精神総動員本部の「意向」があった。商工・農林省が「奢侈品等製造販売制限規則」（通称「七・七禁令」）を公布したのは昭和十五年七月五日（七日から実施）。贅沢品の製造販売を禁止するもので、貴金属や高級織物などが対象とされ、以前から所持していたものを身につけることまでが禁止されたわけではなかったが、愛国婦人会、国防婦人会などの婦人団体が「贅沢は敵だ」との運動を起し、世間に広まり、家庭に広まっていった。

5 「こままわし」には、自分のこまを「敵のかうくうぼかんへ体当たりする日本のひかうきのやうな勢で、大きい人のまはしたこまへなげつけました」という一節があるが、零戦に二五〇キロ爆弾を抱かせて米機動部隊の空母に体当たりさせる特別攻撃隊、つまり「特攻」戦術が生まれたのは十九年十月のレイテ沖海戦だったという。十八年二月の「こままわし」の二年生の遊びの中にすでに「戦術」として取ら

れていたということか。

3 「家のまはり」（山梨県甲府市湯田校二年男子、二月五日）

9 「兵隊さん送り」（群馬県長野原町校第一分教場四年女子、二月十四日）

10 「叔父さんの壮行会」（静岡県沼津市第二校四年女子、二月二十四日）

3 「家のまはり」には、となりの家の「三番目の兄さんは、支那でたたかつてゐます」とあり、この集落での「戦時下」は隣にある。

9 「兵隊さん送り」は、叔父さんの出征見送り。従妹の泣き声につられて涙があふれてきたが、「涙をこすつて、力一ぱい」叔父さん万歳、と叫んで送った。親族の出征であり、「戦時下」の渦中に巻き込まれたということ。

10 「叔父さんの壮行会」は、叔父さんの召集入隊の壮行会に行ったことが内容。日の丸の寄せ書きがうまいとほめられた。私の「戦時下」は叔父さんの武運長久を、毎日お祈りすることになった。

7 「ボクノミタユメ」（千葉県船橋市葛飾校一年男子、二月十三日）

12 「石炭運び」（北海道夕張校六年女子、三月十九日）

13 「尊い先生」（秋田県大館女子校五年、三月二十四日）

7 「ボクノミタユメ」は、一年生のカタカナ文。兵隊になって飛行機に乗った夢を見てアメリカまで行って目がさめた。この夢の続きを翌日見て、ワシントンに行ってルーズベルトに爆弾を落っこそうとして目がさめたというもの。お母さんがこれを「綴方」に書いて学校へ持っていくよう勧めたとあるが、学校の先生に読んでもらいなさいとの意であり、先生がほめる内容であると母親は判断した。

12 「石炭運び」は、広い校庭に山ほど積んである石炭を地下室の貯蔵庫に運ぶもの。北海道の冬の教室で焚く石炭運びを、児童が総出で運んだものであろうが、自分たちのために自分たちが運ぶとの「教育」の一環でもあったと推測できるが、大人の働き手が軍隊に入り、運び手が不足していたことでもあろう。学校での石炭運びは、児童たちの

「戦時下」ということだ。

13 「尊い先生」は、「無邪気だが我儘な一年生」だった私達が、「三年、四年、五年とたつ中に、面白い読物をたのしむ事が出来るやうになり」、「尊い国体を知ることが出来」ようになったのも、「みんな、先生のおかげです」というもの。そんな先生方に「感しやの念を忘れず、必ずりつばな日本人になつて、先生の御恩に報いなければなりません」と、「覚悟」で締めくくった。お国のためにつくすことが出来る日本人になる事が、児童にとつての「戦時下」。

8 「二宮金次郎さん応召」(青森県大鰐校四年女子、二月十三日)

11 「叱られた後」(北海道釧路市旭校五年男子、三月十二日)

14 「おてつだい」(栃木県葛生校三年男子、三月二十六日)

8 「二宮金次郎さん応召」は、「青森のをちさん」が「金属献納」のため、「家宝の鎧や槍や刀」をはじめ、花瓶、鉄瓶、蠟燭台、置物などとともに、「二宮金次郎さんの置物」も出していたこと。「金属類回収令」の公布は十七年五月九日(十二日施行)。寺院の仏具や梵鐘なども強制的に「献納」させられ、一般家庭においても金属の「献納」が行われるところとなっていた。

11 「叱られた後」は、「物資配給帳」は持たされたが、「切符」を持っていかなかったことから、豆腐も納豆も売って呉れなかった。買い物には、「物資配給帳」と「切符」が必要になっていた。商工省が、砂糖・マッチの配給統制規則を公布したのは、十五年十月四日(十五日施行)。十一月一日には切符制が実施され、物資不足にもなつて、順次対象品目が拡大していった。

14 「おてつだい」は、母から頼まれたいんげん豆の皮むきで手がいたくなったが、「兵隊さんのことを思ひ、元氣を出して」むいたというもの。兵隊さんの苦勞を思えば、苦勞も我慢できるということであり、兵隊さんのことを考えて我慢しないと親や先生や周りの大人から諭されたのが、「戦時下」ということ。

以上、第一四半期に掲載された投稿作品を検討したが、内容は、第一四半期ということから、新年に当たつての「覚悟」であり、お正月らしい遊びができるのも兵隊さんのおかげとのお礼であり、正月遊びに際しても「贅沢は敵だ」と大人も子供も自己規制を強いられていたということ。軍隊は、よそ事ではなく、近所の知り合いや肉親が出征し、戦場で戦っていた。学校では、暖房の石炭を運び、家庭では、金属回収に出合ったり、物資の切符制に振り回された児童の姿があった。何事も「兵隊さんの事を思へ」が、家庭でも「覚悟」であつたことが児童の「戦時下」であつた。

第一四半期に掲載された「綴方」の企画作品は、次の二一作品。以下、便宜的に、整理番号を付す。

- ① 「雪ヲ見セタイ」(北海道函館校六年女子、一月十三日・水、第一九六一号)
- ② 「比島ノ皆サンヘ」(東京市高田第五校四年女子、一月十五日・金、第一九六三号)
- ③ 「桜ノ春ヲ見セタイ」(東京府日野校六年女子、一月十七日・日、第一九六五号)
- ④ 「シンケンナ私達」(東京市王子第三校五年女子、同右)
- ⑤ 「世界一の富士山」(岩手県外川目校高一女子、一月二十日・水、第一九六七号)
- ⑥ 「夢に見るジャワ」(東京市旗台校四年女子、一月二十二日・金、第一九六九号)
- ⑦ 「一しよに頑張らう」(秋田県能代市湊城校高一男子、一月二十七日・水、第一九七三号)
- ⑧ 「桜の花の散る姿」(東京市品川区立会校四年女子、二月三日・水、第一九七九号)
- ⑨ 「りつばな国民に」(茨城県日立市駒王校六年男子、同右)
- ⑩ 「米英の少国民と僕たちは決戦」

⑪ 「固い覚悟を誓ひ合へる幸福」
(東京府立第七高女三年女子、二月二十八日・日、第二〇〇一号)

⑫ 「君は僕達の守り神」

(茨城県古河校高二男子、三月七日・日、第二〇〇七号)

⑬ 「大和魂の大道場」

(群馬県伊勢崎市南校高二男子、三月十四日・日、第二〇一三号)

⑭ 「たふとい体験」

(栃木県宇都宮市北校高二男子、三月十七日・水、第二〇一五号)

⑮ 「愉快な忙しさ」

(神奈川県横浜市宮田校高二男子、三月十九日・日、第二〇一七号)

⑯ 「また着たい軍服」

(静岡県静岡市千代田校高二、三月二十一日・日、第二〇一九号)

⑰ 「九時の点呼の時」

(秋田県秋田中学二年男子、三月二十四日・水、第二〇二一号)

⑱ 「特別攻撃隊のおさま」(上)

(大連大正校五年女子、三月三十日・火、第二〇二六号)

⑲ 「高等科の頃せつせつとお家のお手伝」

(同右、三月三十一日・水、第二〇二七号)

⑳ 「一杯でも多く」

(東京市成城学園初等科六年女子、三月三十一日・水、第二〇二七号)

㉑ 「石炭の働き」

(東京市成城学園初等科六年女子、同右)

①から⑨までは、総題目「お手紙ありがたう」の見出しで掲載された「南の新しいお友達へのご返事」。掲載の経緯が一月十三日の第一回掲載に付されている。

勝ち抜く新年にあたつて、共栄圏の新しいお友達の、力強いお便りにこたへて、全国の皆さんから、感激にあふれる御返事が、編集室に山とつまれました。そのなかからえらんで、今日から紙

「戦時下における児童文化」について(その二七)

上に御紹介します(下略)。

「共栄圏の新しいお友達の、力強いお便り」は、一月一日(金・第一九五二号)に、「南から新年のお便り(一)」新しいお友達が日本語で書いて」の見出しで、フィリピンのマニラ市ポニファツシヨ小学校四年女子の「日章旗の下に勉強できる私達の喜び」が掲載され、一月八日(金・第一九五七号)まで、五日間・五作品が掲載された。

①は、カタカナ文で、ところどころに漢字が混じっているが、筆者は六年生であり、宛先であるフィリピンの「お友達」が読めるようにとの意図があったということか。内容は、フィリピンでは雪が降らないだろうから、日本に来た時には雪を見せたいというもの。

②も、筆者は四年生だが、総てがカタカナ文。「フィリピンノ、ポニファツシヨ セウガクカウノ ミナサマ、オゲンキデ イラツシヤ イマスカ」に始まり、自分の写真を送るので、皆で見ている。時々お便りするので、そちらのことも教えてほしいと呼びかけた。

③も六年生が筆者であるが、数詞のほかは全文カタカナ文。日本語を習って、日本を訪れてください。私も大きくなったら、ジャワに行きたいと思っているというもの。

④も五年生が筆者であるが、③同様のカタカナ文。東京は、いま戦争に勝つために、皆真剣に張り切っているという内容。

⑤は、他の記事と同様の、漢字仮名交じり文。「私達は、兵隊さんのおかげで、さむいふゆにもおそれず、げんきにあそんでゐるのです。それを南のお友達にみせてあげたいくらゐです」とした。

⑥では、「力を合はせて、明かるく正しいアジアを作らうではありませんか」と、「大東亜共栄圏の力強い仲間」に呼びかけた。

⑦は、題名の様に、タイ国の諸君と共に、腕をしっかりとくんで、最後まで最後まで頑張り、勝ち抜きましようというもの。「一日も早くアジアの地から、悪魔のやうなアメリカやイギリス」を追ひはらなければ、アジアの平和は来ないのです」と呼びかけた。

⑧は、寒い中でも日本の少国民は一日も休まず、元気に学校へ行っ

ています。春になったら桜の花の写真を送って、日本の春をお知らせしましょうというもの。

⑨は、日本は今東洋平和のために、アメリカやイギリスと戦っているが、それは「アジア人のアジアをきつきあげ」るためで、私は大きくなったらりっぱな日本軍人となって、お国のためにつくそうとおもっているから、モントントン君もアジアの指導者となるりっぱな人になってくださいと綴った。

フィリピンやビルマの「南の新しいお友達への返事」となっていることから、友好親善や日本の自然を知らせたいとの内容も見えるが、紙面担当者の本旨は、大東亜共栄圏の少国民の「連帯」意識の醸成といったところか。

⑩⑪は、「少国民新聞」二千号にあたっての掲載。⑩の掲載に当たって、「少国民新聞」では、今までに二回、綴方使節を日本少国民の代表として満洲国へ送りました。その綴方使節のうち二人から、けふ二千号を迎へたお祝ひに、代表として次のやうな綴方を送ってくれました。」と、掲載事情を説明した。

⑩は、「十二月八日感激の日の心意気でくらし戦場で戦つて居る兵隊さんが、銃後の事を心配しない様に努めなければなりません。又此の様な大戦果や時局を、僕達国民に、一時も早く、又くはしく知らせ、僕達を奮起させて下さつた新聞にも感謝しなければならぬ」と、祝辞を寄せた。

⑪は、満洲国への第一回綴方使節の一員の「お祝ひ」。「大東亜共栄圏内の大勢のお友達が、少国民新聞を通じて仲好しになり、正義の敵米英撃滅の覚悟を誓ひ合へるといふことは、何と幸ひなこと」という祝辞。

⑫は、「石出君の仇討 近づく米機来襲日を思ひ起して お友達が固い誓ひ」の見出しで掲載された。「米機来襲日」は、前年十七年の四月十八日。アメリカの空母ホーネットから発進したB25爆撃機一六機が、東京や名古屋などの日本本土を初空襲。その時に犠牲となった

「石出巳之助のお墓に詣でた」記事を読んだ筆者が寄稿したものの。この三月に高等科を卒業する級友たちが、石出君の仇討ちを期して航空機関係工場へ就職するとの記事に感激してのことで、「航空機乗員養成所」への合格を果たした筆者は、石出君に「僕達の守り神」たらんと願った。「航空機乗員養成所」は、十三年（一九三八）から、全国十五か所に、通信省航空局が設置した民間航空機乗員養成所。卒業後は、陸海軍の航空隊に入隊するものも多かったという。

⑬から⑰は、「一日入校の感激 綴方にみる『僕達の覚悟』」。少国民新聞は、十八年二月十二日に、東日本十八道府県の少国民から百八十人の代表を選んで東京航空学校と整備学校へ「一日入校」を実施し、その体験報告を順次掲載した。

⑬は、少年飛行兵一日入営の体験記。「航空学校こそ荒鷲魂、否、大和魂を鍛錬する大道場だ」と確信したというもの。

⑭は、「今度海軍飛行兵になれる」児童の、「東京陸軍飛行学校」への一日入隊体験。入隊を経験して、「今度の体験を一生の任務とした」と思ふ」と、覚悟を新にした。

⑮も飛行兵の体験記。この大東亜戦争は航空機に依つて決すのだから、一人でも多くが航空戦士となり皇国の空を守ろう、と決心した。

⑯は、「一日ではあるが、静岡県の名誉にかけても、一生懸命少年飛行兵の生活を体験せん」とする意気込み示したもの。飛行兵の体験入営でさえ、「静岡県の名誉」がかかっていたということ。

⑰は、夜の点呼の後、生徒が、持ち込んであった両親の写真に就寝の挨拶をするところを見学したことで、ここが学校であり、家庭でもあるといふことに気が付いたというもの。

⑱⑲は、「第二次特別攻撃隊の秋枝三郎中佐ををちさんにもつ姉弟から、なつかしいをちさんを偲ぶ綴り方が、少国民新聞へ届きました」というもので、⑲⑲は姉。弟の作品掲載は第二四半期。

⑳は、「立派な先生になつてお国の為に尽くします」とおじ様に言ううと、おじ様は、「毎日神様や仏様にお参りして、心を正し、身体を

丈夫にして、勉強につとめ、よくお家のお手伝ひをする子供でない、立派な軍人にもよし先生にもなれないぞ」とおっしゃったとことを「その日の日記に書いてある」とのこと。

⑱は⑱の続き。「をち様、立派な御戦死でお目出たうございます。私もこれからは心を入れかへて、をち様の教をよく守り、一そう勉強に励みます」と仏前に手を合わせたというもの。

⑳は、「成城学園初等科の川上春雄先生は、はうぼうの炭坑を見学して」その時の有様を受持ちの六年生に話したところ、すっかり感激した児童が「炭坑の方たちにお礼と慰問のお手紙」を出したというもの。

内容は、「私達がかうして元気で勉強などしてゐられるのも皆、炭坑の方々が、朝昼夜となく働いていらつしやるお陰だと思つて居ます」という感謝。

㉑は、文化映画で「石炭の働き」をみて、「炭坑の方々のご苦労が身にしました」というもの。

この二作品は、添え書きからすれば、「少国民新聞」の企画したものでなく、この慰問文を読んだ「炭坑の人々」からの持込となる。

何れにしても、第一四半期における企画作品は、児童を対象とした時局に係わる企画に児童をひき入れた、大人の都合であったことになる。

三 昭和十八年第二四半期における「綴方」

第二四半期に掲載された「綴方」は、投稿作品二八と企画作品二四を合せて、五二作品。

第二四半期、二八の投稿作品の内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の一六作品であり、投稿作品に占める割合は五七・一四％。

以下、便宜的に、第一四半期を引き継ぎ、整理番号を付す。

15 「不幸な雀」

16 「秋田県西馬音内校六年女子、四月十四日・水、第二〇三九号」
「産業戦士の兄さん方へ」
(東京市荒川区第二峡田校五年男子、四月十六日・金、第二〇四一号)

17 「出征家族のお手伝ひ」
(千葉県小見川町校五年女子、四月二十三日・金、第二〇四七号)

18 「天長節を迎へて」
(東京市筭校六年男子、四月二十九日・木、第二〇五二号)

19 「勝ち抜く為に一萬製俵」
(山形県赤松校六年男子、四月三十日・金、第二〇五三号)

20 「宮城へ強歩」
(東京市神田区和泉校三年女子、五月五日・水、第二〇五七号)

21 「お母さん」
(茨城県武田第三校六年女子、同日)

22 「楽しい夕食後」
(東京市小石川区礪川校四年女子、五月十四日・金、第二〇六五号)

23 「玉ころがし」
(栃木県長沼第一校三年男子、五月二十一日・金、第二〇七一号)

24 「海軍記念日を迎へ」
(東京市品川区第三日野校六年男子、五月二十七日・木、第二〇七六号)

25 「英霊永遠に生く」
(新潟県巻校高二男子、六月二日・水、第二〇八一号)

26 「今は亡き山本元帥」
(長野県御代田校五年男子、六月四日・金、第二〇八三号)

27 「僕の覚悟」
(東京市蒲田区御園校高一男子、同日)

28 「この仇はうつけぞ」
(東京市渋谷区幡代校六年男子、六月九日・水、第二〇八七号)

29 「海に生きる」
(東京市品川区第三日野校六年男子、六月十一日・金、第二〇八九号)

30 「アツツの誓」
(東京市淀橋区大久保校六年男子、六月十六日・水、第二〇九三号)

「戦時下における児童文化」について(その二七)

15 「不幸な雀」(秋田県西馬音内校六年女子、四月十四日)

巢から落ちた小雀を助けて屋根に返したが、その雀は川の堰に引っかけたかかって死んでいた。しかし、小雀を助けられなかったことが「戦時下」では勿論ない。巢から落ちた小雀に気がついたのが、「東京の近衛兵の敦郎兄さんからおくっていたいただいた」本を読んでいた時だったからで、兄の入管が「戦時下」なのである。

16 「産業戦士の兄さん方へ」(東京市荒川区第二峽田校五年男子、四月十六日)

兄が「産業戦士」であることが、「戦時下」であり、自分も「きつと産業戦士となつて、お兄様方のおとを受けついで、立派な兵器をお国のためにつくり出します」と誓うことが「戦時下」なのである。

17 「出征家族のお手伝ひ」(千葉県小見川町校五年女子、四月二十三日)

19 「勝ち抜く為に一万製俵」(山形県赤松校六年男子、四月三十日)

17 と19は、共に、児童の勤労奉仕。

17 「出征家族のお手伝ひ」は、土曜日に友達を誘って、出征家族のお手伝ひにでかけた。「遊んでゐる少しのひまを見つけて」の少しのお手伝ひでも、「戦地の兵隊さんが聞いたら、きつと喜んで下さるだらう」というもの。自発的で個人的な勤労奉仕だが、出征遺家族宅への勤労奉仕は児童に要請された「戦時下」ということ。

19 「勝ち抜く為に一万製俵」は、炭坑のある村の国民学校児童が、探掘した石炭を入れる俵編み作業を全校生徒で行い、その報奨金は、貯金したり献金したりするもので、児童個人のお小遣いにはならない。断ることの出来ない勤労奉仕で、「戦時下」ということ。

18 「天長節を迎へて」(東京市筈校六年男子、四月二十九日)

20 「宮城へ強歩」(東京市神田区和泉校三年女子、五月五日)

21 「お母さん」(茨城県武田第三校六年女子、五月五日)

22 「楽しい夕食後」(東京市小石川区礪川校四年女子、五月十四日)

23 「玉ころがし」(栃木県長沼第一校三年男子、五月二十一日)

以上の五作品は、銃後の「戦時下」。「銃後」という言葉自体が「戦時下」であるが、学校外の生活における「戦時下」を内容とするもの。

18 「天長節を迎へて」の「天長節」は、天皇誕生日であり、今日は、午前八時に、「国民奉祝の時間」として、一億国民が一斉に「宮城遙拝」「必勝祈願」をすることになっており、「このおめでたい日に僕達少国民は、つつしんで聖寿の御栄えを祝し奉り、限りない聖恩をたたえ奉ると共に、敵米英を撃ち平らげる覚悟を一層固めなければならぬ」と、「覚悟」する六年生が「戦時下」ということ。この文案と表現が本人によるものであるか否かは問わないことにして。

20 「宮城へ強歩」は、住まいのある町会で揃って「宮城遙拝」に行つたことが内容。町内一斉での宮城遙拝が、「戦時下」ということ。

21 「お母さん」は、「軍国のお母さん。銃後のお母さん。何につけても第一番にお母さんです。」と、お母さんの「骨身にこたへる愛、深い御恩、どうして忘れる事が出来ませう」と、六年の女子児童。だから、出来るだけお母さんのお手伝ひをすることを心掛けていとも。「母の愛」は、時代を越えてのことであるが、「軍国」であり「銃後」であることが「戦時下」なのである。

22 「楽しい夕食後」の四姉妹の子供たちは、日曜日の夕食後、「少国民進軍歌」などで踊ります。「踊りながら時々戸口を見るのは、誰か見てゐないかと思つて見るのです」とあるのは、隣り近所の耳目を気にしての事であったか。「少国民進軍歌」は、「週報」(情報局編集)三一六号(昭和十七年十月二十八日号)表紙見返りで発表。軍事保護院、陸軍省、海軍省撰定、文部省検定。裕福な家庭の夕食後の風景だが、歌は、「戦時下」であり、戸口が気になるのも「戦時下」ということか。

23 「玉ころがし」は、ガラス玉遊びで、「駆逐艦にのりくんで、魚雷をはつしやする兵隊さんのやうな気持」で玉をはじくと、標的のガラス玉が「敵の戦艦」のようにはじけたという。遊びの例に戦闘の姿

勢が書かれるが、その姿勢を知りえたのが「戦時下」ということ。

24 「海軍記念日を迎へ」（東京市品川区第三日野校六年男子、五月二十七日）

25 「英霊永遠に生く」（新潟県巻校高二男子、六月二日）

26 「今は亡き山本元帥」（長野県御代田校五年男子、六月四日）

28 「この仇はうつぞ」（東京市渋谷区幡代校六年男子、六月九日）

29 「海に生きる」（東京市品川区第三日野校六年男子、六月十一日）

以上の五作品は、山本五十六連合艦隊司令長官の戦死に係わるもの。

24 「海軍記念日を迎へ」では、連合艦隊司令長官海軍大将山本五十六海軍大将の戦死の報に、「必ずこの仇は、僕は少国民の手で打たう」と誓うというもの。戦死したことが大本営から発表されたのは、五月二十一日午後三時。戦死したのは四月十八日で、発表は遺骨が戦艦武蔵で東京湾に帰ってくる直前まで伏せられていたという。

25 「英霊永遠に生く」は、「山本提督が戦死ときいた時、僕の心には敵愾心が湧き起つた。その夜僕は、神様仏様に、山本提督を偲びながら、僕の心がまへを念じた」というもので、「心がまへ」は、「米英撃滅」ということ。

26 「今は亡き山本元帥」では、山本元帥は、僕達みんなに第二の海軍を立派にしていくのだぞと、「元帥の魂は、米英撃滅に生きてゐるのだ」という。

28 「この仇はうつぞ」は、「故山本元帥の国葬を拜して」の副題を付して掲載されたように、「国葬」を拜しての「覚悟」であるが、「山本元帥戦死の報伝はつて、まだ日浅き中に、アツツ島の守び兵の玉砕を聞き、敵が我心を更に強く持つた。「国葬」は、六月五日。「アツツ島の守び兵の玉砕」が、「少国民新聞」で報じられたのは、六月一日。

29 「海に生きる」は、「海の大將であられた山本元帥は、自ら陣頭に立ち、南の海で壮烈な戦死をなされ」ので、元帥の仇討ちのために、

「戦時下における児童文化」について（その二七）

海に生きる覚悟を固くするというもの。

27 「僕の覚悟」（東京市蒲田区御園校高一男子、六月四日）

「僕」は、足が不自由なので、「軍人となつて、第一線に働くことは出来ない」が、「優秀な飛行機をつくつて、科学によつて米英を撃つのだ」、それまで勉強に励むとの決意だ。作品には、山本元帥への言及はないが、掲載状況から推測すれば、軍人になれないが尽くす道はあるとの「決意」ということか。

30 「アツツの誓」（東京市淀橋区大久保校六年男子、六月十六日）

「僕等は、玉と砕けたアツツ島の勇士に負けず勉強し、体をきたへ」、「敵愾心を盛んにして、この恨みをはらして、二千の英霊をなぐさめてあげます」と誓った。「壮烈なる最期によつて残された尊い教訓」を胸に、あらためて米英必滅を祈りましたとするのが、児童の「戦時下」であった。

以上、第二四半期における投稿作品における「戦時下」は、投稿児童には、兄が軍隊に、工場には産業戦士の兄がいた。自分が産業戦士になるのも間近だ。近所の出征家族宅に勤勞奉仕にでかけ、全校で石炭を入れる俵を作り、全校で石炭運びをした。

町内一斉に宮城遙拜に出かけ、遊びにも魚雷の砲手の姿勢を意識したが、五月二十一日には、山本連合艦隊司令長官の戦死が公表され、国民は衝撃をうけ、児童は、その仇討ちを誓った。山本司令長官の戦死に落ち着かない六月一日には、「アツツ島の玉砕」が報じられ、児童には、アツツ島の恨みをはらすことも「覚悟」に加わったのが、この第二四半期の「戦時下」であった。

第二四半期に掲載された企画作品は、次の二四作品。

以下、便宜的に、第一四半期を引き継ぎ、整理番号を付す。

②② 「三つの行ひ ぜひ見習ひたい手本」

（大連大正校五年男子、四月一日・木、第二〇二八号）

②③ 「神々しい本殿」

- ②4 「まぶたの父の姿」 (東京市赤坂区五年男子、四月四日・日、第二〇三二号)
- ②5 「重つて来た喜び」 (栃木県大田原高女一、四月二十一日・水、第二〇四五号)
- ②6 「短かつた十五分」 (福島県須賀川第一校高二男子、五月七日・金、第二〇五九号)
- ②7 「飛行服を着て」 (東京市本所区柳元校高二男子、五月九日・日、第二〇六一号)
- ②8 「海わしになる誓」 (神奈川県松田校高二男子、五月十二日・水、第二〇六三号)
- ②9 「始めてのつり床」 (北海道室蘭市塵別校高二、五月十四日・金、第二〇六五号)
- ③0 「海軍精神」 (北海道石狩校高二男子、同日)
- ③1 「ああ、山本司令長官」 (東京市本郷区誠之校六年男子、五月二十八日・金、第二〇七七号)
- ③2 「山本元帥を偲びて」 (東京市本郷区誠之校六年男子、同日)
- ③3 「僕等も負けぬぞ」 (東京市淀橋区淀橋第一校六年男子、五月三十日・日、第二〇七九号)
- ③4 「こぶしを固めて」 (東京市渋谷区代々木校高二男子、同日)
- ③5 「山本元帥の国葬」 (東京市赤坂区青南校六年男子、六月六日・日、第二〇八五号)
- ③6 「僕等の登校訓練」 (東京市赤坂区氷川校六年男子、六月十八日・金、第二〇九五号)
- ③7 「ご安心下さい」 (群馬県館林町南校六年男子、六月二十日・日、第二〇九七号)
- ③8 「きつとやります」 (東京市青柳校五年男子、同日)
- ③9 「勝利の守り神に」 (東京市小池校四年女子、同日)
- ④0 「立派な母になる」 (神奈川県鎌倉市第一校六年女子、六月二十三日・水、第二〇九九号)

- ④1 「看護婦になつて」 (神奈川県横浜市青木校三年女子、六月二十五日・金、第二一〇一号)
- ④2 「少年ひかう兵に」 (北海道本別校二年男子、同日)
- ④3 「勝抜く御教訓を」 (東京市板橋区上板橋六年男子、六月二十七日・日、第二一〇三号)
- ④4 「太平洋を戦場に」 (東京市荒川区第二峡田校六年男子、同日)
- ④5 「太平洋を睨んで」 (岩手県種市校六年女子、六月三十日・水、第二一〇五号)
- ②2 は、第一四半期⑱⑲の「第二次特別攻撃隊の秋枝三郎中佐ををちさんにもつ姉弟から、なつかしいをちさんを偲ぶ綴り方が、少國民新聞へ届きました」という弟の作品。「三つの行ひ」は、第一は「祖先をだいに」、第二は「身体を大切に」。第三は「たいへんよく勉強」されたということ、僕もきつと守つて天皇陛下のお役にたつ、立派な海軍軍人になろうと、決意を記した。
- ②3 ②4 は、靖國神社に祀られた戦死者の遺児が靖國神社に参拝する「社頭対面」に参加した児童の「綴方」で、「対面の日の感激 忘れられぬ思出を綴方にして」の見出しで、同じ紙面に掲載された、東京代表の双子の兄弟の作品。第五回目の「社頭対面」は、三月二十七日から二十九日までの三日間で、「遺児四千八百五十九名」の参加が予定されていた。
- ②3 は、「境内には、もう桜の花が咲き始めてゐました。僕たちの父上達も、この花のやうに、いさぎよく大君の爲ちつて行かれたのだと思ひました」と綴った。
- ②4 では、「護国の神と化した父上」に、「君国の爲に忠義をつくします」と誓つたという。
- ②5 は、少國民新聞が募集した、鹿島神宮と香取神宮に奉献した「撃ちてしまむ」の習字に入選した児童の喜びの作品。女学校の入学試験と募集の締切とが重なつたが、合格と入選の喜びが重なつたことが

題名となった。

②⑦②⑧②⑨③⑩は、「海軍航空隊 一日入隊の綴方」。土浦海軍航空隊に、少國民新聞主催の飛行予科練習生として、四月十九日に一日入隊したのは、「東日本の十八道府県から十名づつ選ばれた高等科二年生の友達代表百八十人」。

②⑥では、飛行服に身を固め、航空水上機に打ち乗った。轟々たるプロペラの爆音は、あたりのしめつた空気をふるはせて滑走した。飛行機搭乗が、遂に出来たのだと喜び、今度飛行機にのる時は、海軍飛行兵の時だ、と綴った。

②⑦は、飛行服にいろいろの装備をつけると重くて駈足など少しすると疲れるほどで、飛行兵は身体が強くなければならないということを感じた、という。

②⑧では、体験飛行を終えて、僕はこの感激を忘れず必ず海鷲となって、「君国の為にお尽くし申上げよう」と誓った。

②⑨では、生まれて始めて「はんもつく」に眠ることになり、「これが、本当に合格採用されて来たのなら、どんな気持ちがするだらう」と記した。

③⑩では、「一番驚いたのは、何をするにも、命令一下、皆そろって敏捷であること」で、日本軍人でなければ見られない立派さだった。

③①③②は、「尊い無言の御返事 山本元帥に慰問の絵巻を送った 本郷誠之校の皆さんから綴方」。前年の十二月八日に、山本元帥に慰問の絵巻物を作って送り、その返事を待っていたところ、「今度の壮烈な戦死の報」に接し、その驚き、悲しみ、口惜しさを少國民新聞に送ってきたというもの。

③①では、卑怯な米英を撃滅するために、山本元帥を亡くしたのは誠に残念で、私達は一生懸命勉強にはげみ、大きくなって、必ず米英を叩きつぶして閣下の仇を取り、御英霊をお慰めする、という。

③②では、元帥は亡くなられても、元帥の力強い魂は、日本を守って永久に生きていられるのだ。日本は勝って、元帥の仇はきつと打って

やるのだ、と記した。

③③③④は、「大空に続かう 雛鷲のお兄さんを迎へ決意の綴方」。少年飛行兵の「海の雛鷲が海軍記念日に、なつかしい母校をたづねて、毎日の鍊成振りをお話し、そしてみんな空へつづけとはげましてくださった」ことへの返礼。

③③では、僕達も「文を修め武をねり、質実剛健の気風を養つて、必ず飛行兵にならう」と誓った。

③④は、雛鷲が「第二、第三の真珠湾攻撃、ソロモン海戦は、僕等であるのだ」と結んだとき、体中の血が皆顔に集って、拳を思わず固めていた、というもの。

③⑤は、「祈りながらお見送り 青南校のお友達が感激の綴方」。六月五日の山本元帥の国葬に見送りの列にいた、「元帥の次男忠夫君の母校赤坂区青南校」のお友達「感激の綴方」。「昨日まで、東に南に、大将旗をかかげてたたかつていらつしやつた山本元帥の御ひつぎ、今ここにあり。なんとと言ふ悲しさであらうか」と綴った。

③⑥は、「作品の学校特集 東京市赤坂区氷川校」の作品。氷川校では、校門から入って来ると、班長の号令で、講堂に安置してある御真影に「今日も一日、しっかりと勉強して、体を鍛へて大君に忠義を尽くします」と誓い、「米英撃滅必勝の信念」を新たにするとするもの。

③⑦③⑧③⑨④①④②④③④④⑤は、少國民新聞が、五月二十七日の「社告」で募集し、六月五日の山本元帥の国葬の日が締切りで、六月十八日（金）に入選発表があった「山本元帥の霊に誓ふ」。「われらの司令長官山本元帥の戦死、ひきつづいてアツツ島のわが勇士の奮戦の知らせを受けて、一億国民は、みんな悲憤の涙にくれると同時に、この仇はきつと討たうと固い決心をいたしました。わけてもこれからの日本を背負つて立つ少國民の胸は、誰にもまして、この思ひにたぎりたつのであります。少國民新聞では、その皆さんの決意を、元帥の霊前にお誓ひする文を、皆さんから寄せていただくことにいたしました」ところ、短い時日に三千近くもあつまり、その中から、三人の代表と、七人の

優秀と、九十人の佳作を決め、元帥の霊前にお供えする前に、皆さんに読んでいただくもの。③⑧⑨が代表三人の作品で七月五日に墓前で朗読、④から⑤が優秀作（七人目の優秀作は、七月一日に掲載）。

③⑦は、僕も大きくなったら、りっぱな海軍軍人になって仇を取って見せますと覚悟を記したものだ。

③⑧は、目を閉じると、元帥のお姿が浮かび、力強いお声が聞えて来るような気がし、強い日本の少国民として、しつかりやってまいります、というもの。

③⑨は、女の子ではありませんが、撃ちてしまふの心で、勉強に励み、りっぱな日本国民となることを元帥の霊にかたく誓う、というもの。

④⑩は、自分が男であつたら、自分自身で飛んで行って、米英を撃ちますが、女であることが「何とも残念」ですという。

④⑪は、「せき十字のかんごふさんになつて、山本大将のかたきをうつつもり」。女子児童の覚悟だ。

④⑫は、少年飛行兵になつて、天皇陛下に忠義を尽くして、「戦死します」と決意を記したものだ。

④⑬は、身の回りものが不自由になつたり、不足になつたりしても決して弱音を吐かず、勝つて勝抜く決心ですとした。

④⑭は、大東亜戦争は幾年続かわからない。太平洋は、僕等の将来の戦場で、元帥の精神を一億の国民が皆受けついで行くでしょう、僕も海へ征く大きな志をもっており、と誓つたもの。

以上が、第二四半期での企画作品。第二四半期ゆえの时期的な企画としての靖國神社への遺児の参拝、第一四半期で行つた陸軍航空隊への体験入校に続いての海軍航空隊への一日体験入隊に加え、六月五日の山本元帥の国葬に纏わる企画作品であった。山本元帥の国葬は、想定外であつたと推測するが、靖國神社への遺児の参拝、海軍航空隊への体験入隊は、少国民新聞において、予め予定されていた企画であつたといえよう。

四 昭和十八年第三四半期における「綴方」

第三四半期に掲載された「綴方」は、投稿作品二三と企画作品一九を合せて、四二作品。

第三四半期、二三の投稿作品の内、作品内容に「戦時下」色に見えるのは、次の一六作品であり、投稿作品に占める割合は六九・五七％。以下、便宜的に、第二四半期を引き継ぎ、整理番号を付す。

なお、七月一日から、東京市と府が一緒になつて東京都となつた。

- 31 「郊外教授」
（東京都赤坂区氷川校四年女子、七月四日・日、第二一〇九号）
- 32 「桑の皮むき」
（栃木県長沼第一校三年男子、七月二十三日・金、第二二二五号）
- 33 「ある雨の夜」
（茨城県羽鳥校五年男子、同右）
- 34 「幸福な日曜の朝」
（埼玉県大田校六年女子、七月二十八日・水、第二二二九号）
- 35 「大空へゆかう」
（東京都筈校六年男子、七月三十日・金、第二二二二一〇号）
- 36 「兵隊さん」
（長野県長藤校四年女子、同右）
- 37 「少年産業戦士へ」
（東京都荒川区第二峡田校六年女子、八月一日・日、第二二二三三〇号）
- 38 「露営の歌」
（埼玉県大田校六年女子、八月六日・金、第二二二三七七号）
- 39 「楽しい島おこし」
（福島県信夫鉦山校六年男子、八月十一日・水、第二二四一〇号）
- 40 「働く楽しさ」
（埼玉県宮寺校高二女子、八月十三日・金、第二二四三三〇号）
- 41 「なす焼き」
（神奈川県横浜市磯子校五年男子、八月十五日・日、第二二四四五号）

42 「空へゆく決意」

(埼玉師範男子部附属校高一男子、八月十八日・水、第二一四七号)

43 「拳手の礼」

(栃木県長沼第一校三年男子、同右)

44 「軍神部隊に答へて」

(北海道函館市柏野校五年男子、九月三日・金、第二一六一号)

45 「ああ米川大佐」

(秋田県富根校五年男子、九月十日・金、第二二六七号)

46 「お父さんの思ひ出」

(新潟県高田市大手町校四年女子、九月二十九日・水、第二一八三号)

31 「郊外教授」(東京都赤坂区氷川校四年女子、七月四日)

36 「兵隊さん」(長野県長藤校四年女子、七月三十日)

31 「郊外教授」では、理科の校外学習で玉川に来たところ、野外演習の兵隊さんが浅瀬でお昼ごはんのお米をといでいた。

36 「兵隊さん」では、国民学校の先生だった祖父を尋ねて、兵隊さんが家にやって来た。児童の身近に「戦時下」があったということ。

32 「桑の皮むき」(栃木県長沼第一校三年男子、七月二十三日)

43 「拳手の礼」(栃木県長沼第一校三年男子、八月十八日)

32 「桑の皮むき」は、桑の皮をむいて洋服を作る原料にするため、「学校に割り当てられた千貫」を達成するために、全校児童「七百の少国民は一せいにふるひ立ちました」というもの。

43 「拳手の礼」は、三年生になった時、先生から拳手の礼を教わり、「まるで兵隊さんのやうだ」と嬉しさが胸一ぱいに広がってきます、というもの。国民学校は、勤労奉仕に、兵隊さんの心持にと、その教育を發揮していくということ。

33 「ある雨の夜」(茨城県羽鳥校五年男子、七月二十三日)

34 「幸福な日曜の朝」(埼玉県大田校六年女子、七月二十八日)

37 「少年産業戦士へ」(東京都荒川区第二峡田校六年女子、八月一日)

この三作品は、何れも児童の「銃後」生活の一端を内容とするもの。

33 「ある雨の夜」では、夕食後、お姉さんが、「南支に行つてゐる、となりの仲助さん」に慰問文を書いている。「仲助さん」は南支那に出征しているということ。

34 「幸福な日曜の朝」では、自宅の神棚、仏様を拝み、兵隊さんの武運長久を心からお祈りしたというもの。

37 「少年産業戦士へ」では、大東亜戦争を勝ち抜く為には、強い強い兵隊さんと、立派な兵器資材が必要で、その大切な兵器資材を作り出すためには、お兄さんたちは、大切な身体です、と慰問文に書いた。

35 「大空へゆかう」(東京都筭校六年男子、七月三十日)

42 「空へゆく決意」(埼玉師範男子部附属校高一男子、八月十八日)

35 「大空へゆかう」は、「皇国の興廃をかけて戦つてゐる大東亜戦争には、飛行機の乗員は、いくらあつても足りない。これからの僕等若人は、空へ征かなくてはならない」、空を制するものは世界を制する。だから航空兵を志すというもの。

42 「空へゆく決意」では、僕は必ず少年飛行兵になって、にくい米英の飛行機を、軍艦を、一機でも、一艦でも、やつつけてやりたいと思ふという。

38 「露営の歌」(埼玉県大田校六年女子、八月六日・金、第二一三七号)は、「勝つてくるぞと勇ましく」の軍歌をきくと、「いつも、戦死した兄さんの事を思ひ出します」。戦死を聞かされた時は、「今迄の中で、一番かなしい気がしました。ほんたうは、嬉しいのだけどやっぱりかなしい気持ちで一ぱいでした」というもの。

39 「楽しい島おこし」(福島県信夫鉾山校六年男子、八月十一日)

40 「働く楽しさ」(埼玉県宮寺校高二女子、八月十三日)

41 「なす焼き」(神奈川県横浜市磯子校五年男子、八月十五日)

「戦時下における児童文化」について(その二七)

39 「楽しい島おこし」は、家の島を作るための開墾作業。燃やした笹藪を島にし、お国のためによい作物ができるようにと、心から念じて、ひとほりひとほりに、力をこめて掘ったという、勤労奉仕。

40 「働く楽しさ」では、蚕の世話に桑の皮むきにと、よく働いている。朝から一日、蚕の手伝いでつづかれた。夜は、家中で、桑の皮むきをする事になっていて。村には皮の割り当てが来ていたという。

41 「なす焼き」では、勉強していると、母が、「魚の配給」にいくので、夕飯のおかずのなすを焼くようにと言いつかつた。魚が配給になつてしまったのも「戦時下」ということ。

44 「軍神部隊に答へて」(北海道函館市柏野校五年男子、九月三日)

45 「ああ米川大佐」(秋田県富根校五年男子、九月十日)

46 「お父さんの思ひ出」(新潟県高田市大手町校四年女子、九月二十九日)

44 「軍神部隊に答へて」では、山本元帥の戦死を、アツツ島守備隊の壮烈な最期を聞いて、涙がぼろぼろ出てきました。勉強にも、体練にも「撃ちてしまん」の精神をこめて、米英をやっつけ、幾多の英霊にむくいる覚悟だという。

45 「ああ米川大佐」では、アツツ島で「軍刀を振りかぶつて、最後の突撃をした」米川大佐は、僕達の学校の先輩だ。僕も大佐殿に続いて、りっぱな人になって、米英を打ちのめし、大佐の仇をきつとるつもりだと覚悟を記した。

46 「お父さんの思ひ出」は、アツツ島で玉砕した山崎部隊長の四年生の女子児童からの覚悟の綴方。「大きいお兄ちゃんは空です。小さい兄ちゃんも、軍人になつてお父さんの仇うちをするのです。姉ちゃんも私もみんな心一つにし、「撃ちてしまん」の心がまへを忘れずに、お父さん以下二千数百名の方々のあだを討ちます」との決意だ。以上、第三四半期における投稿作品における「戦時下」は、校外授業で昼食の準備をする兵隊さんに出合ったり、祖父を尋ねて兵隊さん

が家にやってきたりと、身近に兵隊さんとの接触があった。

学校では、全校七百名の児童が桑の皮をむき、三年生になると兵隊さんの様な「挙手の礼」を身につけることになった。

家庭では、隣家の出征兵士や、少年産業戦士への慰問文を作成し、島作りの開墾作業に、養蚕と桑の皮むきに、家事の手伝いにと、働き手として活躍だ。桑の皮むきは、集落での割り当てがあった。家事の手伝いは、魚が配給になって、母が出かけたためだった。

軍歌は、戦死した兄を思いださせ、山本元帥の戦死とアツツ島の玉砕は、英霊に報いる覚悟となり、戦死した米川大佐は学校の先輩であり、アツツ島で玉砕した山崎部隊長の娘からの綴方は、将に「戦時下」そのものであった。

「戦時下」は、これからの、自分たちの戦場は、航空戦であり、少年飛行兵になる決心を固くした。「戦時下」が身近に迫っていたということである。

第三四半期に掲載された企画作品は、次の一九作品。

以下、便宜的に、第二四半期を引き継ぎ、整理番号を付す。

46 「山本魂の後つき」

(東京都渋谷区笹塚校五年男子、七月二日・金、第二一〇七号)

47 「学年で競争貯金」

(群馬県梅島校五年男子、七月七日・水、第二一一一号)

48 「二十余年の歴史」

(群馬県梅島校六年女子、同右)

49 「勝ち抜く力」

(福島県江川校六年男子、七月九日・金、第二一一三号)

50 「撃滅誓ふ薪運び」

(福島県江川校六年男子、七月十一日・日、第二一一五号)

51 「誓ひの式の感激」

(群馬県館林町南校六年男子、同右)

52 「私の学校の貯金」

(埼玉県水深校高二女子、七月十四日・水、第二一一七号)

⑤3 「弾丸となる力」

(埼玉県水深校五年男子、七月十六日・金、第二一九号)

⑤4 「海の子の御約束」

(東京都小石川区青柳校六年男子、七月十八日・日、第二二二二号)

⑤5 「教室の窓の下」

(東京都日本橋区千代田校六年女子、七月二十一日・水、第二二三三号)

⑤6 「亡き兄に続いて」

(神奈川県川崎市堀内校高二男子、八月四日・水、第二三三五号)

⑤7 「私の見る夢」

(神奈川県川崎市堀内校高二男子、同右)

⑤8 「大空を飛んで」

(神奈川県川崎市堀内校高二男子、八月八日・日、第二三三九号)

⑤9 「我が村と節米」

(福島県松枝岐村校高二男子、八月二十日・金、第二二四九号)

⑥0 「私どもの意気」

(福島県郡山市芳賀校六年女子、九月十二日・日、第二二六九号)

⑥1 海軍大臣賞「南洋」(上)

(長野県松代校五年男子、九月十五日・水、第二二七一号)

⑥2 海軍大臣賞「南洋」(下)

(同右、九月十七日・金、第二二七三号)

⑥3 通信大臣賞「御用船」

(鹿児島県枕崎校四年男子、九月二十二日・水、第二二七七号)

⑥4 「慰問絵日記優秀作(一)」

(群馬県館林町南校六年男子、九月二十九日・水、第二二八三三号)

④6は、第二四半期に募集した「山本元帥の霊に誓ふ」に入選した七人目の作品。元帥は死なれても、魂は永久に不滅で、帝国を守護りくださるというもの。

④7④8④9⑤0⑤2⑤3は、「私達はかうして貯蓄 大臣賞に輝く三校から綴方」。大蔵省は、十七年度の貯蓄目標二百三十億円突破に功績のあった個人七十八人と百四十三団体に大蔵大臣賞を贈り、この中に、東日

本から、福島県江川校、埼玉県水深校、静岡県梅島校の三校が入っており、「どんな風にして預金にいそしんだ」のか、綴方を読んで、「皆さんのお手本」にしてくださいとの意図から掲載された。

④7の梅島校では、校長先生が十銭を積み立てた預金通帳が初等科入学時に手渡され、どの学年でも競争で貯金している、という。

④8も梅島校で、桑の皮むき、団栗拾い、いなご取り、兎飼ひなどの仕事やお手伝いの駄賃を貯めた。

④9は、江川校。冬の間に一部が壊れた発電所の修理工事に、勤労奉仕を学校で申し込み、終了後に後援会費として沢山の寄付が会社からあり、これを二百七十億貯蓄総進軍「勝ち抜き力」に協力した。

⑤0も江川校。六月五日の山本元帥の国葬の日に、校長先生を陣頭に、全校児童で、若松軍需工場で使用する薪運びをし、そのお礼に沢山の寄付金を工場から受け、僕達の貯金「勝ち抜き力」の数字が一段と多くなった、という。江川校では、「勝ち抜き力」をスローガンにした貯蓄運動を全校で実施していたということ。

⑤2は、水深校。どのクラスでも、「貯蓄表」を作って、皆に貯金をすすめており、その為に、団栗拾い、桑の皮むき、養蚕の手伝いなどで得た褒美を「全部貯金として入れてしまひます」。

⑤3も水深校。八日と二十日が、学校の貯金日で、「貯金こそ、憎い米英を撃滅する鉄砲玉」だと思い、「命をなげだして戦つてくださる兵隊さんを思へば、不自由をがまんして、貯金する位なんでもありません」。児童の「覚悟」であるが、学校の貯金システムが、児童に「不自由をがまん」させている。

⑤1は、七月五日、多磨霊園の元帥墓前で行われた「山本元帥の霊に誓ふ式」で、代表の一人として「誓ひの文」を朗読した児童の「感激」を記した。小石川区青柳校、小池校と館林町南校の三人が代表で、式後、青山の元帥宅を訪問、「実に質素なお家」で、ここで毎日をお過ごしになったのかと思って、「目があつい涙で一ぱい」になった。

⑤4⑤5は、「海の勇士へ有難う」の上と下。七月十七日、共立講堂で

開かれた「海行く少国民大会」で「海の勇士への感謝と誓ひの文」を朗読した男子と女子、それぞれの「感謝の文」。大会は、船舶運営会・日本海運協会・日本少国民文化協会と少国民新聞の共催。七月十七日に実施され、朗読された作品。

⑤4では、僕達少国民は、海を研究し、海に鍛へて、立派に海へ海へと伸びて、皆様の後に続きますと決心を披露。

⑤5では、兵隊さんへの感謝と共に、武器や食糧を兵隊さんに届けたら、大切な資源を内地に運んでくださる海員の方々に、心からお礼をもうしあげる、というもの。

⑤6⑤7は、「君も僕も海鷲に」の見出しで掲載された神奈川県川崎市堀内校高二児童の作品。同校では、海軍少年飛行兵に「われもわれもと志願」するため、特別に「軍人学級」を設けて、受験のための訓練を行っているという。

⑤8は、戦死した兄の仇討ちのために、少年飛行兵に合格するよう、鉄棒や飛箱などで体を鍛えている。

⑤9は、大空の人となって、「アジヤ十億のために、皇軍の大戦果を胸に抱いて、帝国海軍航空隊の一員となれる」ように訓練につとめているというもの。

⑥0は、少国民新聞主催、七月十八日に実施された「海軍機同乗飛行大会」に選ばれて、初めて空を飛んだ感激の作品。海軍少年飛行兵に志願しているが、同乗飛行で、必ず合格して、にくい米英を叩き潰さなければ止まないという、固い覚悟が一層強まった。

⑥1は、「勝ち抜くために節米」の見出しで掲載。食糧増産と共に節米に努めることが求められており、お米に恵まれない土地の人々がどんなに一生懸命になって、「少ないお米をもっと節約してお国のためにつくさうとしてゐるか」がよくわかるとした。

⑥2は、「イタリアの降伏をきいて」と副題され、「パドリオ政府が、われわれを裏切り、イタリア国民をさへだまして、敵の謀略にのせられ無条件降伏をした」ことについて、「私の心は驚きとくやしきでい

つばいになつた」児童が書き送って来たという。イタリアの降伏は、九月八日。

⑥1⑥2⑥3は、少国民新聞が、海洋報国団や日本少国民文化協会と共催で五月二日に募集し、九月十日に発表された「海と艦船の作品」の「綴方」の受賞作品。

⑥1⑥2は、海軍大臣賞を受賞した作品で、一日では掲載できないため、上下の掲載となったもの。作者の児童は、南ボルネオ生まれで、七歳の時に帰国。早く大きくなって、大東亜共栄圏をかたくしたいと願っているという。

⑥3は、通信大臣賞を受賞。港で「御用船」を見て、この船が、慰問文や弾丸をつんで、遠くの戦場まで行き、兵隊さんたちのために働いてくれるのだと思った。

なお、文部大臣賞を受賞した「僕の見た海」（北海道岩見沢市石見校高等二年男子）か、或いは大東亜大臣賞を受賞した「尊い体験」（南洋庁トラック校六年男子）か、情報局総裁賞を受賞した「塩鮭」（台北市旭校六年女子）が、九月十八日（土、第二一七四号）に掲載された可能性があるが、同紙面が「フィルム欠」の為、確認できていない。

⑥4は、少国民新聞が「二千号記念事業」で募集した「皆さんの夏の鍛錬ぶりを、前線の兵隊さんへ」送ろうという、「慰問絵日記」の優秀作品の（一）。この後、十月にかけて入選した九作品が掲載された。

⑥4は、八月五日、六日、十一日の日記と魚つり、体操風景、水泳などの絵が掲載され、それぞれが兵隊さんへの慰問を内容とした。

以上、第三四半期に掲載された企画作品一九は、第二四半期に募集した「山本元帥の霊に誓ふ」に入選した七人目の作品から始まり、十七年度の貯蓄目標二百三十億円突破で、大蔵大臣賞を受賞した三校の「私達はかうして貯蓄」の他、墓前で行われた「山本元帥の霊に誓ふ式」で、「誓ひの文」を朗読した児童の「感激」の作品や、「海行く少国民大会」で「海の勇士への感謝と誓ひの文」を朗読した男女児童の

「感謝の文」があった。

海軍少年飛行兵受験のための特別な「軍人学級」を運営している国民学校や節米に励んでいる児童、イタリアの降伏に憤る児童の作品が送られてきたので掲載した作品もあった。新聞社からの依頼の推測も可能であるが、その事情は不明。しかし、これらの内容が「戦時下」であることは言うまでもない。

少国民新聞は、「海軍機同乗飛行大会」を主催し、「海と艦船の作品」募集を共催し、「慰問絵日記」を募集して優秀作品掲載を始めた。兵士への慰問の心の醸成であり、飛行兵への導入であったといえようか。

四 昭和十八年第四四半期における「綴方」

第四四半期に掲載された「綴方」は、投稿作品三二と企画作品一五を合せて、四七作品。

第四四半期、三二の投稿作品の内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、次の二七作品であり、投稿作品に占める割合は八四・三八％。

以下、便宜的に、第三四半期を引き継ぎ、整理番号を付す。

- 47 「郷土訪問飛行」
(東京都荒川区第二峡田校六年男子、十月一日・金、第二二八五号)
- 48 「戦地の兵隊さんへ」
(東京都明化校六年男子、十月八日・金、第二一九一号)
- 49 「僕の決心」
(東京都四谷第四校六年男子、十月十三日・水、第二一九五号)
- 50 「フィリピンのお友達へ」
(東京都新堀校六年男子、十月十五日・金、第二一九七号)
- 51 「遺児の皆さん」
(静岡県東豊田校五年男子、十月二十日・水、第二二〇一号)
- 52 「鉾山のをちさん」
(東京都所沢校六年男子、十月二十二日・金、第二二〇三号)
- 53 「お兄さんの出陣を送る」
(東京都四谷第二校五年男子、十月二十四日・日、第二二〇五号)
- 54 「嬉しかった国際電話」
(神奈川県横浜市横浜校六年男子、十月二十七日・水、第二二〇七号)
- 55 「僕等の軍人援護」
(東京都荒川区第二峡田校六年男子、十月二十九日・金、第二二〇九号)
- 56 「龍崎先生を偲んで」
(神奈川県横須賀市田戸校五年女子、十月三十一日・日、第二二一一号)
- 57 「重さうな稲」
(茨城県大賀校高一男子、十一月三日・水、第二二一三号)
- 58 「勇ましい飛行機」
(山梨県諏訪校二年女子、十一月五日・金、第二二一五号)
- 59 「僕等の覚悟」
(山梨県立盲啞学校六年男子、十一月十日・水、第二二一九号)
- 60 「大戦果を知って」
(東京都新井校六年女子、十一月十二日・金、第二二二一号)
- 61 「あの日の誓ひ」
(東京都南海校六年女子、同日)
- 62 「あの朝の喜び」
(東京都小日向台町校二年男子、十一月十七日・水、第二二二五号)
- 63 「大戦果」
(東京都誠之校六年男子、同日)
- 64 「大戦果を聞いた感激」
(東京都誠之校六年女子、十一月十九日・金、第二二二七号)
- 65 「大戦果と僕たち」
(東京都東町校五年男子、同日)
- 66 「僕等の誓ひ」
(東京都東町校五年男子、同日)
- 67 「古賀長官閣下へ」
(東京都誠之校五年男子、十一月二十六日・金、第二二三三号)
- 68 「はちのす」
(静岡県稲取町校三年男子、十一月二十八日・日、第二三三五号)
- 69 「私どもの軍人援護」

「戦時下における児童文化」について(その二七)

70 「やり抜く覚悟」
(北海道名寄校五年女子、十二月一日・水、第二三三七号)

71 「十二月八日」
(茨城県日立市駒王校五年男子、十二月十日・金、第二三四五号)

72 「海ゆかば」
(東京都荒川区第二峽田校六年男子、十二月十日・金、第二三四五号)
(神奈川県横浜市間門校五年女子、十二月十五日・水、第二三四九号)

73 「ぼくもひかう兵だ」
(東京都小日向台町校二年男子、十二月十七日・金、第二三五一号)

47 「郷土訪問飛行」(東京都荒川区第二峽田校六年男子、十月一日)

58 「勇ましい飛行機」(山梨県諏訪校二年女子、十一月五日)

47 「郷土訪問飛行」は、村上飛行兵の乗っている飛行機が、母校の真上を一直線に通過し、自分の家の方へ飛んで行ったという内容。

58 「勇ましい飛行機」も、中島少年飛行兵の乗っている飛行機が、母校の真上を一直線に通過し、自分の家の方へ飛んで行き、だんだん小さくなって見えなくなった。東京都荒川区に、山梨県に、雛鷺が母校の国民学校を空から訪問したというもの。

「少国民新聞」(昭和十八年九月十九日・日・第二一七五号)は、「あすは航空日 雛鷺が郷土を訪問 大空に仰ぐ兄さんの姿」を掲載し、九月二十日に、少年飛行兵が「空から晴れの郷土訪問」を行い、「神州男児の征くところ、一路航空決戦へ!!」と書いたピラを郷土の後輩、皆さんの頭上にまきます」と報じた。

48 「戦地の兵隊さんへ」(東京都明化校六年男子、十月八日)

53 「お兄さんの出陣を送る」(東京都四谷第二校五年男子、十月二十四日)

57 「重さうな稲」(茨城県大賀校高一男子、十二月三日)

59 「僕等の覚悟」(山梨県立盲啞学校六年男子、十一月十日)

68 「はちのす」(静岡県稲取町校三年男子、十一月二十八日)
以上の五作品は、児童の様々な「銃後」の様相。

48 「戦地の兵隊さんへ」は、夏季鍛錬期間に、千葉県の小湊の海洋訓練にいったこと。八月十一日から十七日までの一週間、小湊の国民学校に天幕を張って、少年団の野営訓練を受けた。

53 「お兄さんの出陣を送る」は、学徒出陣を、在籍校の校門の前で整列して見送ったというもの。出陣学徒の壮行会が、明治神宮外苑で挙行されたのは、十月二十一日。掲載日から推測するに、前日には新聞社に原稿は到着していたであろうから、壮行会を見送ってすぐに児童に依頼されたことになる。個人であるか学校への依頼であったか不明であるが。

57 「重さうな稲」は、食糧増産への決意が内容。食糧増産だ。一本の稲も虫に食はずな。今年こそ米を十分にとらねば、兵隊さんにもうしわけがない。家の田圃では、一面に稲の穂が出て、早いところはもう黄色になっている。

59 「僕等の覚悟」では、耳が聞こえないから、銃を取って戦えないのが、僕の何よりも残念なことであるが、僕等聾啞者は、戦線へは行けなくても、銃後に残って、産業戦士の一員として、兵隊さんの必要な飛行機や弾丸を送る任務がある、と決意を記した。

68 「はちのす」は、のどかな児童の午後であり、庭の青桐の上に登って、海の方をみると、輸送船が五隻、「えんとつからけむりをだしながら〇〇の方へはしつてゆきました」というもの。「〇〇の方へ」という書き方が、戦局の激化を、児童にまで強いもの。

49 「僕の決心」(東京都四谷第四校六年男子、十月十三日)

52 「鉱山のをちさん」(東京都所沢校六年男子、十月二十二日)

55 「僕等の軍人援護」(東京都荒川区第二峽田校六年男子、十月二十九日)

69 「私どもの軍人援護」(北海道名寄校五年女子、十二月一日)

以上の四作品は、児童の様々な慰問。

49 「僕の決心」は、遺家族慰問。国民学校の先輩で、爆薬の研究中に亡くなった陸軍兵技中尉の実家に慰問に行き、子供の頃からの生い立ちを聞き、「僕はこれからますます勉強して、大東亜戦争完遂のため、この体を捧げたいと思ひました」というもの。

52 「鉾山のをちさん」は、鉾山で働く人々への慰問文。「暗い炭鉾の中で、毎日お国のために、お働き下さる皆様ありがとうございました。今日は僕達の誇りとする、少年団の班別訓練のやうすを少しお知らせします」。

55 「僕等の軍人援護」は、出征兵士への慰問袋送りが内容。「僕等の班では、毎月慰問帖を戦線の兵隊さんへお送りすることにしてゐる」が、その送り先は、出征している近所のおじさんだ。また、おじさんの家のお手伝いになるように、道路清掃の時には、おじさんの家の前を、心をこめて掃いた。

69 「私どもの軍人援護」は、先生に引率されての遺家族宅へ勤労奉仕。沢山の稲束を運ぶ仕事だが、先生は「弾丸を運ぶつもりで」と言い、私は倒れそうになっても「兵隊さんは重い大砲でさえかついで」と自分を励ました。

50 「フィリピンのお友達へ」(東京都新堀校六年男子、十月十五日)

54 「嬉しかった国際電話」(神奈川県横浜市横浜校六年男子、十月二十七日)

この二作品は、フィリピン独立のお祝いが内容。

50 「フィリピンのお友達へ」は、「私たちは一生けんめい勉強し、お互いに、手を取り合って、大東亜戦争を勝ちぬきませう」というもの。フィリピンが独立を宣言したのは、十八年十月十四日であり、掲載日から推測すれば、新聞社から予て依頼があったということか。

54 「嬉しかった国際電話」は、少国民新聞から、フィリピンのお友達へ独立のお祝いの電話をかけた児童が、その時のことを書いたもの。国際電話と言うのは、普通の電話で、こんな電話で話が出来るとか

思っていると「かかりました」と受話器を渡された、というもの。

51 「遺児の皆さん」(静岡県東豊田校五年男子、十月二十日)

56 「龍崎先生を偲んで」(神奈川県横須賀市田戸校五年女子、十月三十一日)

両作品とも、亡くなった人への弔意が内容。

51 「遺児の皆さん」は、靖國神社で、戦死した「お父さんとの対面をどんなに喜び、胸に描いて上京されたことでしょう」と、支那事変で傷痍軍人になった父を持つ児童が、「この仇は僕等の手で打たう」と呼びかけた内容。靖國神社の臨時大祭は十月十四日の「招魂の儀」から始まっていた。

56 「龍崎先生を偲んで」は、校務中に殉職した先生の一周忌での弔意文。自分たちの学年を引率して自然観察に行つた際に事故で亡くなった先生の一周忌がきたが、昨日(十月三十日)、大阪の教育塔に合祀された。「恩師感謝の日」(十月三十日)には、大阪市大手前の教育塔に、「皆さんの恐ろしいために身をささげて散つた十六柱の国民学校の先生方が合祀された」が、その一人が龍崎先生。自然観察の帰途、電車にはねられそうになった児童を救うため、自分がその犠牲となった。教育塔は、昭和十一年(一九三六)に帝国教育会の発案・決議により教育に関する殉職者・殉難者の慰霊を目的として建設され、毎年合祀が教育勅語が発布された十月三十日であったことから、この作品を「戦時下」とした。

60 「大戦果を知つて」(東京都新井校六年女子、十一月十二日)

61 「あの日の誓ひ」(東京都南海校六年女子、同右)

62 「あの朝の喜び」(東京都小日向台町校二年男子、十一月十七日)

63 「大戦果」(東京都誠之校六年男子、同右)

64 「大戦果を聞いた感激」(東京都誠之校六年女子、十一月十九日)

65 「大戦果と僕たち」(東京都東町校五年男子、同右)

66 「僕等の誓ひ」(東京都東町校五年男子、同右)

67 「古賀長官閣下へ」(東京都誠之校五年男子、十一月二十六日)

以上、八作品は、十一月九日十六時大本営から発表されたブーゲンビル島沖での「真珠湾以来の大戦果」(「少國民新聞」十一月十日・水、第二一九号)について、その感激と戒めを内容とするもの。

60 「大戦果を知つて」では、真珠湾以来の大戦果を喜びながらも、「この戦果のかけには、尊いぎせい十五機のあつた事を思ふと、私は南の方にむかつて黙祷を捧げずにはゐられなかつた」と記した。

61 「あの日の誓ひ」でも、大戦果であるが、「かへらない十五機の飛行機を考へると、無念の涙が出て来た」と、犠牲を悼んだ。

62 「あの朝の喜び」は、すばらしい我が無敵海軍の戦果で、万歳を叫び、ありがとうといいましたが、「ぎせいになられた将兵の方々には、何とも申しようのない、かんしやの思ひで一ぱいです」と、ここでも、犠牲者に感謝を捧げた。

63 「大戦果」でもまた、「僕たちは、よろこんで散つて行つた護国の勇士に対し、何と感謝したらよいのだらう」とし、この仇は必ず撃つと誓った。

64 「大戦果を聞いた感激」でも、さらに、「十五機以上の尊い犠牲」に、「私の胸にはいやが上にも敵愾心がむくむくと泉の如く沸き上がり、米英撃滅の決心が更に新しくよみがへつて参りました」と、覚悟をしめた。

65 「大戦果と僕たち」でも、「未帰還十五機の発表」に、「今にみろ、つきには僕たちがゐるんだぞ」と、心の中で叫んだ。

66 「僕等の誓ひ」では、「ブーゲンビル島沖航空戦のはじまつた頃、僕たちは何も知らずに、校庭で大詔奉戴式をしてゐたのだ」、その空に続く南海では、兵隊さんたちは、戦を続けてゐられたのだ。何とすばらしい大戦果であろうと、少年航空隊に入っている作者は飛び上がるほど喜んだと記した。

67 「古賀長官閣下へ」は、古賀司令長官宛、「山本閣下のあとをついで、それにもまさる大戦果をおあげになつた閣下の御苦労は、どん

なでせう」と記し、自分たちは「まだ小さいので貯金をしたり物を大切にしたり、電力、ガスの節約にできるだけつとめてゐます」とした。

70 「やり抜く覚悟」(茨城県日立市駒王校五年男子、十二月十日)

71 「十二月八日」(東京都荒川区第二峡田校六年男子、同右)

72 「海ゆかば」(神奈川県横浜市間門校五年女子、十二月十五日)

73 「ぼくもひかう兵だ」(東京都小日向台町校二年男子、十二月十七日)

以上の四作品は、「大東亜戦争」開戦二周年を内容とするもの。

70 「やり抜く覚悟」は、「昭和十六年十二月八日開戦以来、ここに二周年を迎へ」、米英はわが本土空襲をやるにちがいないから、戦場ばかりでなく、日本の国の守りを固くしようと呼びかけた。

71 「十二月八日」は、開戦以来二年間を勝ち続け、さらに力のある限りやり抜かねばならない、と誓うもの。

72 「海ゆかば」は、大詔奉戴日(十二月八日)での黙祷の時、先生がひいた「海行かば」を聞いて、今はもう神として、靖國神社にまつられている「母の弟の五郎にいちやん」を思い出したというもの。

73 「ぼくもひかう兵だ」は、入学前の十二月八日に開戦となり、二年目となったが、家のおじさんは飛行兵に志願をし、「ぼくも兵たいになるのなら、ひかう兵になりたい」というもの。

以上、第四四半期に掲載された投稿作品にみられる「戦時下」は、大人の思惑による様々な「銃後」であった。

「航空日」に少年飛行兵が郷土を空から訪問。事前に知らされていた児童が、全校挙げて歓呼でむかえたが、飛行の目的は、「神州男児の征くところ、一路航空決戦へ!!」と書いたピラを郷土の後輩の頭上に播き、少年飛行兵への応募を促すものであり、児童は、少年飛行兵を媒介に「戦時下」の当事者として組み込まれる存在であった。

少年飛行兵を校庭で迎えることも「銃後」であったが、夏季鍛錬期間に、少年団の野営訓練に出かけ、学徒出陣を、戦場へ向かう輸送船を見送り、耳が不自由だから産業兵士となって戦争を支える決意を示

す児童の「銃後」もあった。

児童の「銃後」は、出征遺家族宅への勤労奉仕に、出征兵への慰問文送りのみならず、鉾山で働く人々へも慰問文を送ることも要請（強制的な）された。

大東亜共栄圏の共存から、「フィリピンのお友達へ」フィリピン独立のお祝いをする役目も割り振られた「銃後」の児童もあった。

しかし、第四四半期での「戦時下」で最も多数を占めたのは、十一月九日十六時大本営から発表されたブーゲンビル島沖での「真珠湾以来の大戦果」について、その感激と戒めを内容とするものであった。

また、十八年の第四四半期ということから、「大東亜戦争」開戦二周年を内容とするものも少なからずあり、これぞ「戦時下」であり、「銃後」であったということになる。

第四四半期に掲載された企画作品は、次の一五作品。

以下、便宜的に、第三四半期を引き継ぎ、整理番号を付す。

- ⑥5 「慰問絵日記優秀作」(二) (東京都戸山校三年女子、十月一日・金、第二二八五号)
- ⑥6 「慰問絵日記優秀作」(三) (北海道美流渡校高二男子、十月六日・水、第二二八九号)
- ⑥7 「慰問絵日記優秀作」(四) (宮城県須江校四年女子、十月八日・金、第二二九一号)
- ⑥8 「慰問絵日記優秀作」(五) (静岡県沼津市第三校六年女子、十月十五日・金、第二二九七号)
- ⑥9 「慰問絵日記優秀作」(六) (千葉県銚子市高神校六年男子、十月二十日・水、第二三〇一号)
- ⑦0 「慰問絵日記優秀作」(七) (神奈川県西秦野校六年男子、十月二十二日・金、第二三〇三号)
- ⑦1 「慰問絵日記優秀作」(八) (岩手県飯岡第一校高一男子、十月二十七日・水、第二三〇七号)

⑦2 「慰問絵日記優秀作」(八) (茨城県日立市駒王校三年男子、同右)

⑦3 「慰問絵日記優秀作」(終)

⑦4 「神国日本に生まれた喜び」 (北海道幌北校五年女子、十月二十九日・金、第二三〇九号)

⑦5 「かつまで戦はう」 (福島県下川校高二男子、十二月五日・日、第二三四一号)

⑦6 「忘るまじ、この涙」 (東京都小日向台町校二年男子、十二月八日・水、第二三四三号)

⑦7 「仇は討つぞ」 (東京都南桜校六年女子、十二月二十二日・水、第二三二五号)

⑦8 「よき日を迎えて」 (東京都日比谷校五年男子、同右)

⑦9 「皇太子様の御誕生日」 (東京都幡代校六年女子、同右)

⑥5から⑦3までは、少国民新聞が「二千号記念事業」で募集した「皆さんの夏の鍛錬ぶりを、前線の兵隊さんへ」送ろうという、「慰問絵日記」の優秀作品。(一)は、第三四半期の終り、九月二十九日(水、第二一八三号)に掲載された。

⑥5は、七月二十一日と二十四日の日記。二十一日は「お花屋さんごっこ」、二十四日は金魚売りから金魚を買ってもらったというもの。三年生の女子児童の「銃後」が描かれ、この頃、「銃後」では金魚売が巷を流していたことが知れる。お花屋さんでは、売り子と買って帰る少女が絵柄。金魚売では、水槽で泳ぐ金魚を見ている少女が絵柄。

⑥6は、高等科二年男子の八月一日から五日までの五日間の日記。一日から夏休みとなったが、この日から勤労奉仕で、作者は炭坑での作業が当番。二日は、弟と割り当てられた軍馬の飼葉刈り。三日は村の相撲大会。四日は久しぶりの水泳。五日は、炭坑での勤労奉仕の日。右手にまめが四つできた。絵柄は、ラジオ体操、草刈り、相撲、水泳の飛び込み、炭坑内での作業。

⑥7は、四年女子の八月十日の日記。午後から洗濯をし、夕方に鶏の世話をした。絵柄は妹と鶏の世話。

⑥8は、六年生女子の七月二十一日、八月七日と十五日の日記。七月二十一日から八月二十日まで、毎朝五時に神社を参拝し、ラジオ体操をする予定。八月七日は「○○山のかんし所へ慰問」に行った。十五日は、瓦山神社で大東亜戦争必勝と兵隊さんの武運長久を祈った。絵柄は、ラジオ体操、慰問遠足、整列しての礼拝。

⑥9は、六年男子の八月七日と八日の日記。七日は、夏の暑い晩に、涼しい軒下で風呂に入っている様子を兵隊さんに知らせることが内容。八日は、青少年団での行進が内容。絵柄は入浴と青少年団の団旗を先頭に行進している様子。

⑦0は、六年男子の、八月五日と十六日の日記。五日は、集落での相撲大会。十六日は、出征兵士宅での草取りの勤労奉仕。絵柄も、相撲と草取り。

⑦1は、高等科一年男子の八月十九日の日記。出征兵士宅での勤労奉仕。絵柄は、草取り。

⑦2は、三年男子の八月十六日の日記。戦争ごっこが内容で、絵柄も竹の鉄砲で射撃の様子。

⑦3は、五年女子の八月七日の日記。月遅れの七夕まつりの飾りつけの短冊に「皇軍勇士の武運長久を祈る」と書いた。絵柄は、飾りつけの様子。

⑦4「神国日本に生まれた喜び」(福島県下川校高二男子、十二月五日)は、「自分達の手で半年の間、一心こめて育てた稲を、皇大神宮へお納めする第二回献米稲作運動」で代表として奉献式に参列した児童が新聞社に送って来たもの、との事。「日本は神の国である。農事の国である。半年の辛苦の僕達の献米稲も、神の御力によって出来たものである」ということを心に強く感じた、という。

⑦5「かつまで戦はう」(東京都小日向台町校二年男子、十二月八日)は、「三度感激の日を迎えて」の見出しで掲載され、「山本元帥や加藤

少将のかたきをとつて、米英をかうふくさせるのです。大詔奉戴日の今日、このけつしんをつよくしました」と結んだ。

⑦6「忘るまじ、この涙」(東京都南桜校六年女子、十二月二十二日)

⑦7「仇は討つぞ」(東京都日比谷校五年男子、同右)

両作品は「玉碎部隊の霊に誓ふ」の見出しで掲載、十一月二十四日のマキン島、二十五日のタワラ島守備隊玉碎についての覚悟が内容。

⑦6「忘るまじ、この涙」は、アツの勇士に、山本元帥に、そして今日、新たにタワラ、マキンの勇士に続き、長期戦に、勝ち抜く覚悟をしつかりかため、又護国の神となられた英霊に心から感謝を捧げやみません」と決意を記した。

⑦7「仇は討つぞ」では、「今朝も全校生徒そろつて、宮城前にぬかづき、この仇はきつと討ちますと誓ひました」と、国民学校の所在地から、全校児童一同が「宮城前」で誓いをたてたというもの。

⑦8「よき日を迎へて」(東京都久松校六年男子、十二月二十三日)

⑦9「皇太子様の御誕生日」(東京都幡代校六年女子、同右)

この二つの作品は、「皇太子様を寿ぎ奉る」の見出しで掲載されたもの。同じ六年生だが、⑦8では、昭和八年十二月二十三日の「御降誕を告げるサイレンの音、ラジオの臨時発表、号外の鈴の音は、全国津々浦々にまでひびき」と記すが、⑦9では、「私は小さかったので当時の事はよく知らない」とし、「お姉ちゃん達に聞くと、祝砲と同時に、家々の軒から日の丸が出たさうである」と記した。

この二つの「綴方」の他、同じ紙面には誕生を祝う短歌、俳句と書方が掲載されており、特集といった趣を呈している。

以上、第四四半期に掲載された企画作品一五作品は、半数以上の九作品が、「少国民新聞」二千号記念事業で募集した「慰問絵日記」であり、その他は、「第二回献米稲作運動」の代表の作品、大東亜戦争開戦二周年を迎えた決心であり、十一月のマキン・タワラ両島での玉

砕について、仇討ちの覚悟であった。

この内、「少國民新聞」二千字記念での作品募集の企画による作品掲載は、その経緯が迎れるが、その他の作品が掲載された事情については詳らかではなく、「綴方」の見出しがなく掲載された作品を企画作品として、ここで検討対象とした。

五 昭和十八年における「綴方」の概要

十八年に掲載された「綴方」は、児童が自主的に投稿した作品（投稿作品）一〇二と少國民新聞が募集した作品（企画作品）七九の合計で一八一作品。

投稿作品で第一四半期に掲載された一九の内、「戦時下」色の見えるのは、一四作品。投稿作品に占める割合は約七三・六八%と高い比率であり、その内容は、第一四半期ということから、新年に当たっての「覚悟」であり、正月を迎えられているのも兵隊さんの御かげであり、正月の晴着は「贅沢は敵だ」と、大人も子供も自己規制のさ中であり、軍隊へは近所から、肉親から出征し、戦場で戦っていた。物資は切符制になり、「兵隊さんの事を思へ」が、家庭でも合言葉であった。

第二四半期に掲載された投稿作品二八の内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、一六作品。投稿作品に占める割合は約五七・一四%であり、第一四半期には及ばないものの、約六割であり、投稿作品の半数以上ということになる。

第二四半期における「戦時下」は、投稿児童の兄が兵士に、産業戦士に駆り出され、自分が産業戦士になるのも間近であり、それまでの間、出征家族宅の勤労奉仕、全校での石炭俵作り、石炭運びに汗を流し、町内一斉での宮城遙拝、独楽まわしでの魚雷砲手の姿勢を意識したが、五月二十一日の山本連合艦隊司令長官戦死の公表で、国民は衝撃をうけ、児童は、その仇討ちを誓った。更に、六月一日には、「アッ

ツ島の玉砕」が報じられ、児童は、アツツ島の恨みをはらすことも「覚悟」に加わったのが、この第二四半期の「戦時下」であった。

第三四半期に掲載された投稿作品二三の内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、一六作品。投稿作品に占める割合は約六九・五七%であり、第一四半期には及ばないものの、約七割ということになる。

第三四半期における「戦時下」は、郊外授業で兵隊さんに出合ったり、祖父宅に兵隊さんが来りと、身近に兵隊さんとの接触があった。学校では、全校児童が桑の皮をむき、三年生になると兵隊さんの「挙手の礼」を身につけることになった。

家庭では、隣家の出征兵士や少年産業戦士への慰問文を作成し、自作りの開墾作業に、養蚕と桑の皮むきに、家事の手伝いと、働き手として活躍した。

軍歌は、戦死した兄を思いださせ、山本元帥の戦死とアツツ島の玉砕は、英霊に報いる覚悟となり、戦死した米川大佐は学校の先輩であり、アツツ島で玉砕した山崎部隊長の娘からの綴方は、将に「戦時下」そのものであった。

第四四半期に掲載された投稿作品三二の内、作品内容に「戦時下」色の見えるのは、二七作品。投稿作品に占める割合は約八四・三八%であり、十八年で最も高い比率であった。

第四四半期、児童は、空からくる少年飛行兵を校庭で迎え、少年団の野営訓練に出かけ、学徒出陣を見送り、耳が不自由だからと産業兵士となって戦争を支える決意を示した。

児童は、出征遺家族宅への勤労奉仕に、出征兵のみならず、鉾山で働く人々へも慰問文を送ることも要請された。

大東亜共栄圏の共存から、「フィリピンのお友達へ」独立のお祝いの国際電話をする役目も割り振られた。

しかし、第四四半期での「戦時下」で最も多数を占めたのは、十一月九日十六時大本営から発表されたブーゲンビル島沖での「真珠湾以来の大戦果」について、その感激と戒めを内容とするものであった。

また、十八年の第四半期ということから、「大東亜戦争」開戦二周年を内容とするものも少なからずあり、これぞ「戦時下」であり、「銃後」であったということになる。

十八年の投稿作品にみられる「戦時下」は、戦局に応じた「銃後」での児童の役割であり、大人の思惑による様々な児童の「銃後」であったということが出来る。

一方、企画綴方は、第一四半期、一月十三日から掲載の始った、総題目「お手紙ありがたう」の見出しで掲載された「南の新しいお友達へのご返事」。これは、一月一日（金・第一九五二号）に、「南から新年のお便り（一）新しいお友達が日本語で書いて」の見出しで、フィリピンのマニラ市ポニファツシヨ小学校四年女子の「日章旗の下に勉強できる私達の喜び」が掲載され、一月八日（金・第一九五七号）まで、合計五日間（五作品）が掲載されていた事への返事であり、児童による大東亜共栄圏共存の演出であったか。

二月には、二千号の発刊を迎えた「少国民新聞」を祝う「私達の誓ひとお礼」が、三月には、東京航空学校と整備学校へ「一日入校」の体験報告が掲載され、第二次特別攻撃隊の秋枝中佐を叔父さんを持つ姉弟からの作品が掲載された。

第二四半期は、三月末に行われた遺族の靖國神社昇殿参拝の「感激」に始まり、第一四半期で行った陸軍航空隊への体験入校に続いての海軍航空隊への一日体験入隊に加え、六月五日の山本元帥の国葬に纏わる企画作品が掲載された。山本元帥の国葬は、想定外であったと推測するが、靖國神社への遺児の参拝、海軍航空隊への体験入隊は、少国民新聞において、予め予定されていた企画であったといえよう。

第三四半期は、十七年度の貯蓄目標二百三十億円突破で、大蔵大臣賞を受賞した三校の「私達はかうして貯蓄」の他、墓前で行われた「山本元帥の霊に誓ふ式」で、「誓ひの文」を朗読した児童の「感激」の作品、「海行く少国民大会」で「海の勇士への感謝と誓ひの文」を朗読した男女児童の「感謝の文」があった。

海軍少年飛行兵受験のための特別な「軍人学級」を運営している国民学校や節米に励んでいる児童から、イタリアの降伏に憤る児童から、作品が送られてきたと言うが、自発的な送付か新聞社からの依頼があったかどうか、その事情は不明。

また、少国民新聞は、「海軍機同乗飛行大会」を主催し、「海と艦船の作品」募集を共催し、「慰問絵日記」を募集して優秀作品掲載を始めた。兵士への慰問の心の醸成であり、飛行兵への導入であったといえようか。

第四四半期は、掲載された企画作品一五作品の半数以上の九作品が、「少国民新聞」二千号記念事業で募集した「慰問絵日記」であり、その他の他は、「第二回献米稲作運動」の代表の作品、大東亜戦争開戦二周年を迎えた決心であり、十一月のマキン・タワラ両島での玉砕について、仇討ちの覚悟であった。

この内、「少国民新聞」二千号記念での作品募集の企画による作品掲載は、その経緯が迎れるが、その他の作品が掲載された事情については詳らかではなく、「綴方」の見出しがなく掲載された作品を企画作品として、ここで検討対象とした。

以上、十八年の企画作品は、時局に係わる企画に児童をひき入れた、大人の都合であったことになる。

従って、十八年の「綴方」作品は、児童からの投稿作品では、戦局に応じた「銃後」での児童の役割であり、大人の思惑による様々な児童の「銃後」であり、企画作品では、大人の都合が児童を時局に係る企画に引き入れた結果であったということになる。

（二〇一八・一一・三）